

写本文化は会話的であった。それは、〈公演による新作発表〉によって同座する作者と読者とが身体的に結びつけられていた、という一事からも明らかだ。

古代および中世時代を通して「読み」は音説を、ときには誦詠すら意味していた。ありあまる証拠がありながらも、この問題に関する記述は珍しい。だがわたしはわざなりに色々な時代から、手に入れやすい資料をもとにいくつかの証拠を目に掛けることはできる。たとえばアリストテレスは『詩学』(二六)のなかで次のように指摘している。「悲劇は叙事詩と同様に俳優の所作や演技のたすけをかりずとも効果を發揮しうる。なぜならば台本をただ朗説するだけ劇の内容がわかるからだ。」ローマでは新著の発表に際して公衆の前で朗説するのが、今日の本の出版に匹敵する形式であった。このローマの新作発表の形式も、われわれの主題である朗説としての読書という観点にサイドライトを当てるものだろう。印刷技術が発明されるまで読書はこのようなものであったのである。ケニヨンのローマ人の習慣についての報告『本と読者たち』八三一四頁を引用しよう。

タキトゥスは著作家が新作を発表するさいの苦労話を描いている。著作家は発表会場や椅子をレンタルで借りなければならず、また個人の恩情にすがって聴衆を集めるのである。それによれば金持ちはいらなくなつた古家を貸してくれ、自分の自由民や貧しい配下の保護民をさくらしてつかわしてくれるけれども、椅子の費用は負担してはくれないという。こうした事情は今日の音楽界にもそつくりそのまま残っているのだ。つまり新人歌手は発表の場所を手に入れるためにポケットマネーでホールを借り、自分の声を聴いてもらうために寄せせん懸命にならなければならない。そうである

が朗説を目的とするように作られていたことをよく示してくれる。寸鉄ひととをさす警句詩ですらも通行人に呼びかけるように作っていた。(「去れかし、見知らぬ人よ。」等)またカリマコスや彼の垂流の詩人たちの警句詩のなかには、「碑すらも通行人にむかって語りかけると考へて作られたものがあったほどだ。ホメロスの叙事詩はもちろん公衆を主としての朗説を目的としていたし、個人的讀書の習慣が一般的となつたのも、叙事詩のさわりの段を読むプロの職業がないこと存在したのである。ペイシストラトスという男はどの程度かはよくわからぬにせよ、ホメロスの本文の体裁をととのえるのに力があつたといわれるが、彼もパンアテナイアの祭りでおこなわれるホメロス詩の朗説会の伝統に先駆をつけた功績者である。ディオゲネス・ラエルティオスによれば(一・五七)、「ソロンがホメロスの朗説は一定の順序にしたがつて行われなければならない」と定めた。それは次なる朗説者がそのままの朗説者が読みおえた箇所からたちにひきつげるようにするためであった」そうである。

ヘロドトスその他の散文家についてのいろいろな報告に照らせば、散文も詩におどらず口頭で発表されていた。そして口頭発表の習慣はそれが詩におよんだ影響とほかならない影響を散文にあたえたのである。ゴルギアスのバイオニア的な作品演出を特色づける音への注意深いところばかりも、もし彼の作品が朗説を目的として書かれなかつたとしたらその意味を失つてしまつただろう。インクラースは散文の正統の後繼者であり、その地位を奪つちがいないと主張したけれども、彼の主張もゴルギアスが散文に与えた音楽的芸術性あればこそであったのだ。その後、ハリカルナッソスのディオニシオスのような批評家たちは歴史家・著者を雄弁に対するのと同じ評価基準で判定したのだった。彼等は、現代のわれわれならばジョンのちがいということを当然頭おく基準のちがいなど一切考慮せずに、同じレヴェルで比較したのである(五〇一五一頁)。

ハダスは次に(五一二頁)、聖アウグスチヌスの『告白録』のなかの有名なくだりにむかう。

古代を通じ、またその後の時代もすとひきつづいて、読者がひとりで本を読むときにも、詩であれ散文であれ、きまつて音読されたものである。黙説が異例であったことは聖アウグスチヌスが『告白録』(第五巻、第三部)のなかでアンブロシウスの習慣をたいへんに注目すべきものとして挙げているのでもそれがわかる。〔だが彼が読むとき、彼の眼は頁のうえを滑り、彼の心は意味を探し出すべきとする。しかし彼の声と舌は休止している。〕この不思議な人物の讀書風景を一目見ようと訪れる見学者すら出る始末だった。そこでアウグスチヌスは説明を試みようとする。

「おそらく彼は恐れていたのだろう。作者があいまいな表現をとったとき、注意深い聞き手が彼にその意味を説明するよう迫られる。」

モーゼズ・ハダスは彼の『古典文学への手引き』のなかで口頭による作品発表の問題をケニヨンよりもさらに深く追求している(五〇頁)。

文学といふものは書齋にこもって黙説するものではなく、公衆の面前で朗説されるべきものであるという文学觀は、文学の本質についての觀念をあいまいにしてしまった。われわれはある作家の本を読むとき、彼の文学的貢献をほつきと意識するのであり、作曲家の音樂をただ聴いているだけではそれほどの意識は生じない。ギリシャ人たちの間では作品発表のふつうのやり方は公衆を前にしての朗説であった。ます注目すべきは、作者自身の手でそれがおこなわれ、次にはプロの読み手や俳優がそれをおこなつた。この公開朗説会の習慣は、本が出版されるようになり、読みかたの技術が一般にひろまつた後にも、作品の最初の発表形式としてつづいたのである。この習慣が詩人の生計にどのような影響をおよぼしたかはほかの所で見ることにしよう。ここでは口頭発表が彼等の文学の性格にどのような影響をおよぼしたかに注目しておこう。

写本はあらゆるレヴィルで、中世の文学上のしきたりをつくりあげた。

ハダスは彼の名著のべつの箇所でも、この問題を追求している。そしてこれはH・J・チャイターの『写本から印刷へ』によつて、中世期を課題にひきつがれて論じられる問題である。チャイターの仕事は本書が書かれるための多くの理由を提供してくれた本でもあるのである。

【弦楽四重奏のような】小数の楽器のために書かれた音楽は大ホールのために書かれた音楽とは音調もテンポもちがう。本にしても同じことだ。文字の印刷はいわば著者の公演のための「ホール」を拡大したのであり、ついには文體のあらゆる面を変更させるにいたつた。ハダスはこのところをたいへんよく説明してくれる。

すべての古典文学は、聴衆との会話、もしくは聴衆への呼び掛けとしてとつえられるかもしれない。古典劇は現代劇はたいへんちがつて、というのは、四万人の観客を前にして太陽のもので演ぜられる劇は、暗い部屋のなかで四百人ほどの観客を前にして演ぜられる劇はどうい同じようにはなりえないからだ。同様に、祭りの場で大声で演ぜられるための作品と、修道院の孤独のなかで、個人によって一語一語味わわれる作品とはおのずから別物であるはずだ。とくに詩は、そのすべての形式

れわれはともすると特殊な時代の文学をあつかっているというのを忘れがちなのだ。われわれがあつかっている時代は表記の基準が一定せず、文法上の正確さはそれほど尊重されず、言語がいまだ流動的で、国語とナショナリズムとの関係も今日ほどには密接ではなく、文体といつてそれは個人のものといいよりは、固定した、たいへんに複雑な修辞学上の規則のことを意味していた時代だったのである。他人の本を写し、回覧するという習慣は、写本時代には称赞すべき行為のみなされたのが、印刷の時代になると、こんなことをやうものならまちまち著作権侵害のかで訴えられることになる。公衆を楽しめることで利益をえようとする作家たちは今日ではほとんど散文作家である。他方、十三世紀の中葉までは詩のみが大衆を惹きつけることができたのだった。したがってもし、印刷術が発明される以前の数世紀に書かれた文学作品にたいして正当な価値評価がなされるためには、われわれがその下で育ってきたさまざまな偏見がいかに広範囲におよぶものであるかをますます悟るための力を必要としている。われわれの趣味の基準にしたがって中世文学を判断しようと、まだ中世文学はただ骨董的価値の視点から評価されるべきだという、無意識の欲求に抵抗すべきである。ルソーの言葉によれば、「批評の本質は、われわれが普段の生きるための条件となっているものからまったく違った条件の理解を助けるところにある。」(1頁)

文学のしきたりが口誦、筆写、印刷という三つの形式によっていかに大きな影響を蒙ったかという、以上のチャイターの記述によつて、筆者は「グーテンベルクの銀河系」の執筆を思ひたつたのであつた。中世の言語と文学はどこか今日の映画やテレビショーの状況に似たところがある。チャイターの言葉によれば、それは「今日われわれがいう意味でのフォルマリズム批評をほとんど生みださなかつた。」

自分の作品の良否を作者が知りたければ、聴衆のままで試みればよかつた。聴衆の承認がえられれば模倣者がたちまちに陸續とあらわれ類似の作品をつくりはじめる。だが作者たちはモデルや構成によって縛られる必要はなかつた……聴衆は動きが多く波瀾にとんだストーリーを好んだのであつた。他方、一般的にいつて登場人物の性格描写のほうはさして巧みでなくてもよかつた。性格描写に熱を入れるのは作者ではなく、むしろ声や身振りに変化をもたせて演技する朗読者のほうだった。(3頁)。

十二世紀の聴衆は連続物のかたちで朗読を聴いたものだ。だが今日では、「われわれは自分的好きなときに本を開

視覚と聴覚の習慣的な経験パターンの変化、両者の役割や相互作用比率の交替は、中世の読者と近代以降の読者の心理過程に大きなギャップをつくりだしたのだった。チャイターは言葉をつづける。(10頁)。

なんといつても中世の風習にとつて、現代の読者の読書習慣ほど無線なものはない。現代の読者といえば新聞の見出しをさうとかもついた大変な記憶力ほど遠いものはない。中世人たちは活字が与える運営に喜ばれず、またまるで子供がこぼを覚えようと斜め読みをしながら、あとで丹念に読みかねず価値があるかどうかを判定する。または右に左にさうと視線を動かしながら論旨をどうぞよろとする。「こんな習慣は中世人からみればどんでもない話であろう。」逆に現代の読者にとって中世人たちは、文章中の一語一語はそれぞれ独立した存在であり、ときにはひとつでの問題がすなわちひとつでの問題であつた。この事実は世人によつて書かれた作物を編纂するひとびとにとくに興味のあるところだ。第二点は、読者の数はすぐなく、聴き手のほうが多かつた當時では文学は主として公衆をまえにして朗読するために書かれたという点である。したがつて文学の性格はいきおい文学的というよりは、修辞的となり、修辞規則が創作を支配することとなつた。

キリスト教初期の教父時代、および、中世期における音読に関するドム・ジャン・ルクレールの考察が、本書がいよいよ印刷に回されるというときに、世間の注目を惹いたのは、まことに時機を得たことといわねばならない。彼の

き、読むことができるだけではなく、望みとあらば前の頁にもどることすらできる。要するに写本から印刷へといふ

進歩の歴史は、アイディアを伝達したり受容したりする方法を聴覚的手段から視覚的手段へとすこしずつ置き換えていった過程の歴史であった。」(4頁) チェイターはロイド・シェイムズの『わたしたちの口語』から、文字使用のために生じたわれわれの感覚生活の変化をそのものばかりでとらえている箇所(29頁)を引用する。(7頁)。

「音と視覚、話すことばと印刷文字、眼と耳とはそれれなんらの共通点ももない。言語のこれらの対立形式を結びつけ、それぞれの形式によくまれる觀念を融合させること——人間の脳がやつた仕事のなかで複雑さにおいてこれに匹敵するものはない。しかし幼年時代にこうした融合がひとたび達成されたのちには、逆に二つの形式を頭のなかで切り離し、それぞれ独立したもののとて考えることが不可能になるという事態が生じた。われわれは文字を思わずには音を考へることはできず、文字は音を所有するものと信じている。われわれは印刷された頁はわれわれがのべるものの写し絵であると考え、「報紙」と呼ばれる神秘的なものは聖なるものであると考えている……印刷の発見は印刷されたことばを流布し、それがその後つして失つたことのない一種の權威を印刷に授けたのであつた。」

黙読のなかにすら潜在する筋運動感覚への影響を強調しながら、チャイターは喉を痛めた患者に読書を禁止する医師を話題にする。「医師のなかにはひどく喉を痛めた患者に読書を禁止するものもある。というのは黙読といえども読者の気づかぬうちに声帯の動きが抑制されるからである。」彼はまた読書の際に生ずる聴覚と視覚との相互作用を考察する(6頁)。

そういうわけで、われわれが話したり書いたりするときにも、想念は筋肉運動イメージと結びついたかたちで聴覚イメージをともなう。そしてこの聴覚—筋肉連合イメージはただちに語の視覚イメージへと変換される。話手や書き手は今日ではもはや、印刷された文字、もしくは書かれた文字のかたちでしか言語を意識できないのである。読み書きの過程にともなう反射運動は起き手からも隠されてしまい、そのためこの変化過程の分析をたいへんに困難なものとしている。聴覚イメージと筋肉運動イメージとはそもそも分離不可能なものであろう。そしてそれ自体の純粹な姿ではイメージなどといふものはもとと存在せず、分析

『学問愛と神への懼れ』は、この等閑視されてきた事項をそれにふさわしい中心的地位に復帰せしめるのである(1八九頁)。

というわけで、もしいかに読むかを知ることが必要になるとすれば、それはまずなによりも、〈聖典の朗読 lectio divina〉に参加できるようになるものであった。この音みはなにかいなり立っているのであるうか。どのようにして読みはなされるのか。これを理解するためには、(legere 読む)および(mediatu 聞想する)という二つの語が聖ベネディクトにとってもつていた意味、そして今中世期を通じてもち続いた意味を想起する必要がある。これら二つの語が表現しておいたものと理解して初めて、中世修道院文学の特徴的な性格のひとつが明らかにされるであろう。性格のひとつとは回想という現象であり、これについては後にさらに精しく触れるはずである。文学に関して、ここである基本的な所見を述べておくべきだろう。中世においては古代におけると同様ひとびとは今日の讀書家とはちがつて主として眼では読みます、口唇と耳とで読んだのである。彼等は見たものを發音し、それを耳で聴く。その結果真を読むことは「眞の声」を聽く、ということになる。それはまさに聴覚的讀書であった。(つまり、(legere)は同時に「聴く audire」をも意味していたのである。現在でもフランス語の「ラテン語を聴く」という表現がラテン語を「理解する」という意味をもつとうに、昔は耳にしたものだけを人は理解したのだ。たしかに、默読またはごく低い発声による讀書が存在しなかつたわけではない。このほんの一例、聖ベネディクトがおこなつたよう) tacite legere (默読)とか legere sibi (私を読む)、とどう特別な表現によつて区別された。また聖アウグスチヌスによれば clara lectio (朗読)に対し legere in silentio (黙読)があつた。だが一般には legere と legere がなんらかの活動をもく単独で使われるときには、歌唱や声を出して行われた)書字のようだ)からだ全体の活動をもく單独で行なつての読みを意味するといふのだ。

古代の医者たちは自分たちの患者に読書を歩行やランニング、または球戯とおなじレザーベルにある肉体の運動として勧めたといふ。創作や写本の書き写しにあたつては、自分自身や秘書にディクテーションを行つてゐるかのようだ。声高な発声がおこなわれたものである。この事実は中世写本のなかにある間違いが書記の誤記をもつて記録と考へるとびたりと説明がつく点とも照合する。今日、音読用録音機を使用すると同じ種類の間違いが生ずるのである。

さらに先の箇所(90頁)で、ルクレールは声高の音読という讀書にはつきものの行為が、いかに默想、祈り、学び、記憶といった中世的な理念体系のなかに入つていくかを論じる。

さくらに先の箇所(90頁)で、ルクレールは声高の音読という讀書にはつきものの行為が、いかに默想、祈り、学